

優良賞

自由部門：「大真面目な双子姉妹が大学の夏休みに青春を取り戻す話。」

造形デザイン学科 1年2組 岩室怜那

「馬鹿になりたいよね、なんか」

「わかる」

時は大学一年生の夏休み。とある双子姉妹の会話だ。

なんとなく付けたテレビに流れてきた高校生たち。「学校にもばっちりメイク」、「SNSでキラキラ写真」。限りある青春を謳歌するように自分のやりたいことを自由にやっている若者たちに感銘を受けた。ちなみに両者19歳だ。

大真面目な姉は教師を目指す正義感の強い人間で校則を破ることはもってのほか、怒られることが怖いと休憩時間でさえ勉強をしていた。

一方妹は合理性を求める理論派で、同年代の娯楽を素直に楽しむことができない冷めた人間だった。

大学生の夏休みということで時間はたくさんある。

「せっかくなら本気で青春してみるか」

そんな一言を皮切りに、妙に真面目な“夏休みの馬鹿青春計画”が始まった。

「クレーンゲームで一万円使ってみたいね」

ユーチューブで攻略動画を漁りながら、二人で貯めたバイト代一万円分で本気で遊ぶことにした。

結果はことごとく悲惨だった。駄菓子屋で三十円で買えるお菓子を五百円で取ったり、初心者用の台だと店員に勧められて知らないアニメのキャラクターキーホルダーを取ったりした。

それでも二人の中には新鮮でキラキラした感情が生まれていた。一球一球に心を奪われて、アームが動くたびに「来い！」「頑張って！」と声が漏れる。取れた景品を見た瞬間、心のどこかが満たされた。無駄遣いではない大切な思い出を買うために一万円は安すぎる、と帰り道に笑い合った。

「JKしたいね」

女子高校生といえばあの某有名カフェだと、二人でカフェに向かった。平日の夕方でちょうど女子高校生たちが放課後に立ち寄り、その後ろに並ぶ。なんとなく肩身の狭さを感じながら、難解なサイズの注文を前に「グランデ 意味」と真剣に調べているカオスさがとても可笑しかった。

結局「一番大きいやつで」と頼むととんでもないサイズが届き、二人で大爆笑するとともにキラキラしていた女子高生の大変さを知った。写真を撮ってSNSにあげようと思ったところで、そもそも使い方が分からなかったことに再び大爆笑した。

「夜遊びしてみよ」

そんな調子で夜遅い映画にも行った。睡魔が襲うことを不安に思いつつ、数人しか入っていないほぼ貸し切り状態の映画館に贅沢さをしみじみ感じた。

映画の内容は正直あまり覚えていない。眠気との戦いも含めて、青春とは小さな非日常であるということを実感した。

「スポーツで熱狂するのも青春じゃない？」

別角度の青春にも挑戦してみた。応援グッズで武装し、慣れない自撮り写真を撮ってみる。ゲーム開始の一時前に行ったのはさすがにまじめすぎたと反省した。試合途中も本気の戦略会議をしながら観戦。冷静かつ熱狂し、場の空気感を存分に味わった。ゲームは負けても帰り道は息が上がるほど笑っていた。「こんな真面目すぎる観戦も青春の一部だよね」と顔を見合わせ、二人で満たされた気持ちになった。

振り返ってみれば、私たちの計画もまた「真面目すぎる馬鹿な青春」だったと思う。クレーンゲームにお金を躊躇なく使い、サイズがわからないドリンクに全力で挑み、夜中の映画館で心が温かくなり、声がかれるほど叫んでスポーツに熱狂してみる。青春という無形なものを本気で形にする嬉しさを感じた。

「これも私たちなりの青春じゃない？」笑いながらつぶやく。お金や周りの目。そんな合理を気にしていた自分たちもいた。でも、今回の一連の“はしゃぎ”は、そんなもやもやを越えた楽しさだった。

計画結果をこのエッセイにまとめながら、相変わらず馬鹿真面目な二人だなと感じている。

真面目であることは、決して悪くない。でも、たまには不条理に笑って、馬鹿になって、誰かに怒られるかもとドキドキしてみるのもいいのかもしれないと思った。この計画はそんな日常を送ってみたかった私たちだからこそ感じられた最高の青春であり、お金に変えられない思い出となった。

「来年はタピってみようか」